

救急車搬送患者の実態調査と市民啓発活動について

斎藤美矢子 大下昌恵
宇部市健康福祉部

【緒言】 近年、救急医療は、高齢化の進展や疾病構造の変化等に伴い、需要は年々増加し、救急病院の受け入れ紹介回数の増加やコンビニ受診等による勤務医の疲弊など様々な課題が山積している。

このような中、救急搬送に占める軽症患者数は増加してきており、適切な救急車の利用や救急医療のかかり方についての市民啓発が必要となってきた。

そこで、県内で初めて実施した宇部市・山陽小野田市救急車搬送対応患者の実態調査結果から、本市の軽症患者の実態を明らかにし、効果的な啓発活動について検討した。

【方法】 救急車搬送患者の実態調査

- ① 実施期間 平成23年10月～平成25年3月
- ② 実施医療機関 宇部・小野田圏域の救急告示病院 9機関
- ③ 調査回収数 搬送人員12,690人中10,784人(85.0%)

上記調査回収数のうち、宇部市内の消防署及び消防出張所が搬送した8,617人のうち、次に定義する軽症患者2,183人について、搬送年月日・時間・年齢・性別・転帰・原因別・結果(傷病名等)を分析した。

定義：本研究における軽症患者とは、救急隊員が軽症と判断し、かつ救急処置後、入院を要せず帰宅した者

【結果】 救急車搬送件数の内、軽症患者は25.3%であった。年齢別では、60～89歳が多く、次に20～39歳であった。搬送時間帯別でみると、0～8時は、20～39歳が一番多く、18～24時は70～79歳が多かった。月別では、搬送件数は、12,1,2月の順に多く、軽症患者は、8、7、6月の順に多かった。また、0～9歳では、18～24時の利用が41.0%と多く、約6割は打撲や熱傷など外傷によるものであった。原因別では、外因性と内因性は、4:6で、20歳以上では、内因性の方が多かった。傷病名より、緊急を要さない又は救急車以外の手段での受診が可能であると考えられるものは、29.1%であった。

【考察】 軽症患者が夏に多いのは、脱水や熱中症など内因性疾患によるものが多いためと考えられる。また、休日・夜間救急診療所では、小児科は、平日夜間診療を行っているにも関わらず、乳幼児や学童の救急車利用が、夜間帯に多いことは、小児外科領域の傷病が多いためと考えられる。20～39歳の救急車利用は、深夜から早朝にかけて多く、外因性では事故や負傷が多いが、内因性では、腹痛や胃腸炎、過呼吸など家庭での手当て可能な傷病が多い。若年層の応急処置の知識が薄いのではないかと考える。

【結語】 これらのことから、高齢者や20～39歳の若年層を対象に、軽症患者が増える夏前に重点的に行うことが効果的である。また、乳幼児や学童期における事故防止についての啓発や若年層へ家庭での手当ての方法などを啓発していくことが必要であると考えられる。